

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年8月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万1428トン、前年同月比100.4%、価格は1キログラム当たり310円、同114%となった(表1)。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7867トン、前年同月比98.6%、価格は1キログラム当たり281円、同117.2%となった(表3)。
- 台風の影響などによる大雨の影響、日照不足、残暑などから生育の回復が遅れ、中央市場への出荷が集中する露地野菜を中心に、地方市場では品不足となっており、全体的に高値が続くことが見込まれる。

(1) 気象概況

上旬は、北海道地方では低気圧や前線の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多かった。一方、東北地方から沖縄・奄美にかけては太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多く、東北南部では1日頃に、東北北部では2日頃に梅雨明けした。

旬平均気温は、暖かい空気に覆われやすかったことに加え、晴れて強い日射の影響を受けたことにより、9日は三重県の桑名で日最高気温40.4℃を観測するなど、各地で記録的な高温となった。このため、東・西日本と沖縄・奄美でかなり高く、北日本で高かった。特に、西日本では旬平均気温平年差が+20℃となり、1946年の統計開始以降、8月上旬として1位の高温となった。旬間日照時間は、西日本、沖縄・奄美でかなり多く、東日本太平洋側で多かった一方、北日本日本海側で少なかった。旬降水量は、北・西日本、東日本日本海側、沖縄・奄美で少なかった。

中旬は、西日本や東日本太平洋側を中心に太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、沖縄・奄美では期間の後半を中心に湿った空気や台風第9号などの影響を受けやすく曇りや雨の日が多かった。12日は台風第5号が岩手県に上陸し日本海へ進み、北日本太平洋側を中心に大雨や荒れた天気となった所があったほか、16日は台風第7号が接近した関東地方で大雨や荒れた天気となった所があった。また、西日本太平洋側を中心に期間の

終わりに湿った空気が流れ込んだため、大雨となった所があった。旬平均気温は、全国的に暖かい空気に覆われやすかったことや晴れて強い日射の影響で気温が上昇したこともあり、東・西日本でかなり高く、北日本と沖縄・奄美で高かった。岐阜県的美濃では16日に40.0℃を記録するなど、東・西日本を中心に猛暑日となった所があった。旬間日照時間は、東日本太平洋側と西日本で多かった一方、沖縄・奄美で少なかった。旬降水量は、北・西日本太平洋側、沖縄・奄美で多かった一方、北・東・西日本日本海側で少なかった。

下旬は、北日本では、低気圧や湿った空気の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多かった。東・西日本では、期間の前半は太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多かった。

旬平均気温は、暖かい空気が流れ込みやすかったことや西日本を中心に太平洋高気圧に覆われて強い日射で猛暑日になった所が多かったため、北・西日本と沖縄・奄美でかなり高く、東日本で高かった。旬間日照時間は、北・東日本太平洋側で少なかった。

旬降水量は、東日本日本海側で少なかったが、東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり多く、北日本日本海側と北日本太平洋側で多かった。東日本太平洋側の旬降水量は平年比422%で、1946年の統計開始以降、8月下旬として1位の多雨となった。期間の後半は台風第10号が29日に鹿児島県に上陸し、31日にかけて西日本から東海道沖に

進んだため、大荒れとなった所があった。また、台風周辺や太平洋高気圧の縁を回る暖かく湿った空気の影響で、西日本を中心に線状降水帯が発生し、各地で記録的な大雨となった。静岡県の網代では72時間降水量が1976年の統計開始以降で最も多い608.0mmを記録した。沖縄・奄美では、高

気圧に覆われて晴れた日もあったが、台風第10号に加えて熱帯低気圧が接近したため、曇りや雨の日があった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本					日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
西日本					日本海側 太平洋側				

資料：気象庁「8月の天候」

1 平年を上回る水準

2 平年並み

3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万1428トン、前年同月比100.4%、価格は1キログラム当たり310円、同114%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（8月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	111,428	100.4	94.9	310	114.0	117.5	310	316	305
だいこん	6,242	100.3	86.1	124	113.9	114.0	91	128	154
にんじん	6,333	125.2	101.3	119	78.2	90.0	123	119	115
はくさい	5,480	90.3	84.5	92	110.2	97.7	92	101	86
キャベツ類	15,989	99.6	97.7	94	119.4	96.8	94	102	87
ほうれんそう	568	95.4	88.4	973	109.6	115.4	919	983	1,017
ねぎ	3,675	105.9	99.7	367	101.9	109.4	339	391	379
レタス類	9,897	104.7	108.7	186	122.8	103.9	202	156	198
きゅうり	7,567	93.9	92.8	401	126.4	128.7	393	412	400
なす	3,454	91.8	92.3	401	124.6	122.5	412	425	372
トマト	7,457	88.7	88.5	422	121.4	128.7	373	390	506
ピーマン	2,452	111.2	106.0	518	109.3	127.9	545	489	516
さといも	260	97.1	82.5	456	109.7	113.9	533	484	410
ばれいしょ	5,057	94.0	89.7	240	156.6	160.6	267	253	215
たまねぎ	9,538	107.3	100.1	142	127.1	127.8	157	140	129

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、高めに推移した前年を2割以上下回り、平均を1割下回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が、やや安めに推移した前年を2割近く上回ったものの、平年をやや下回った(図3)。

果菜類は、きゅうりの価格が、堅調推移とな

り前年を2割以上上回り、平年を3割近く上回った。(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、下旬に向けて落ち着いたものの、平年並みであった前年を3割近く上回った。(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

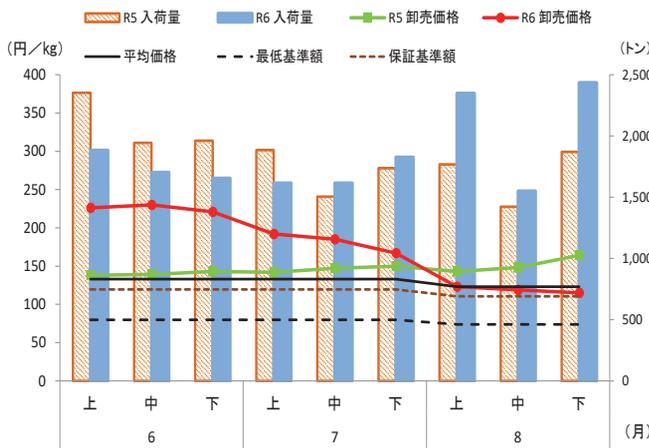


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

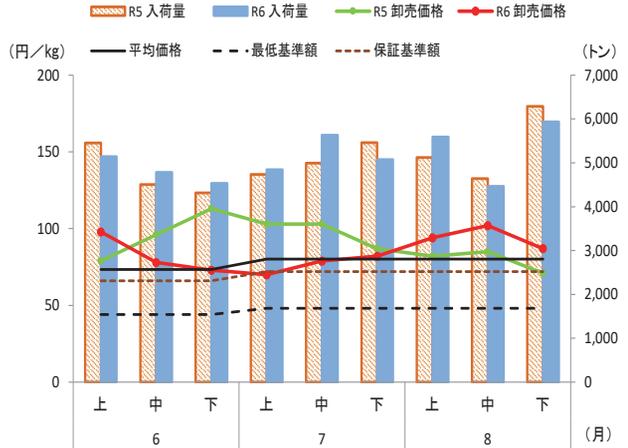


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

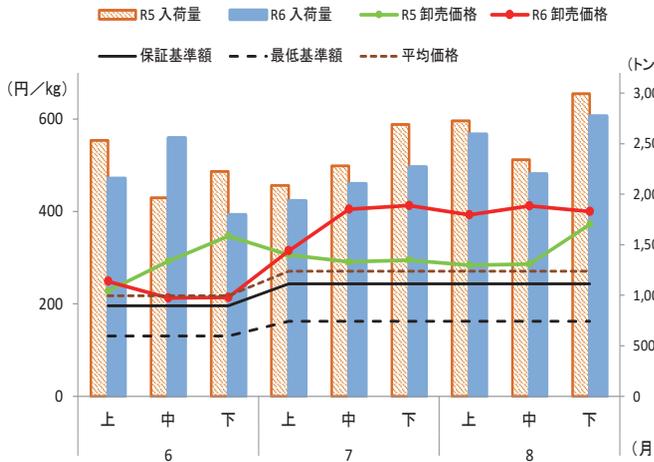
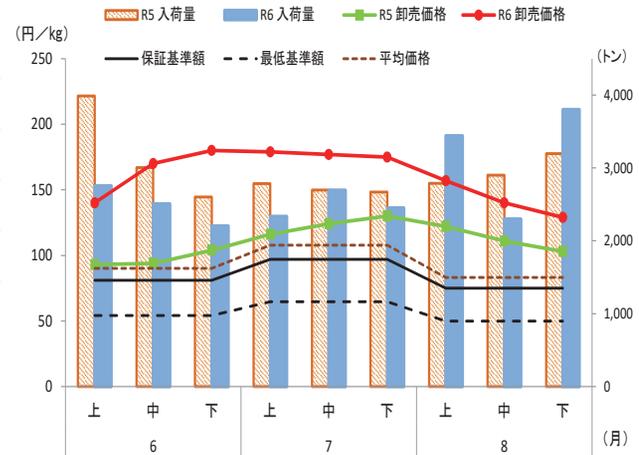


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	8月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産を中心に青森産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、高温により生育はやや前進傾向となった。青森産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は3~5日程度前進傾向となった。降雨や高温の影響により黒芯症、軟腐病の発生が散見され、また虫害も見られる。総入荷量は少なかった前年並みとなり、平年を1割以上下回った。 価格は旬を追うごとに上がり、前年、平年とも1割以上上回った。
	にんじん 	北海道産中心の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで6~7月の高温の影響により生育順調で前進傾向となった。中国産の輸入は前年を2割以上下回っている。総入荷量は少なかった前年を2割以上上回り、平年をわずかに上回った。 価格は月間を通して大きな動きはなかったものの、高めに推移した前年を2割以上下回り平年を1割下回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調でやや前進傾向ではあるが、高冷地で降雨の少ない地域はやや小玉傾向となった。総入荷量は少なかった前年を1割弱下回り、平年を1割以上下回った。 価格は中旬以降やや落ち着いたものの、やや安めに推移した前年を1割ほど上回り平年をわずかに下回った。
	キャベツ類 	群馬産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育は7月下旬の高温・干ばつの影響をやや受けている。一部軟腐病、株腐病が散見される。総入荷量は前年、平年ともわずかに下回った。 価格はやや安めに推移した前年を2割近く上回り、平年をやや下回った。
	ほうれんそう 	群馬産、栃木産の高冷地中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年をやや上回り、雨よけ中心である。高温障害の影響により生育にばらつきがあり、加えて降雨によるハウスの冠水などが散見された。栃木産の作付面積は前年並みで、高温による生育停滞や圃場での萎びが散見された。関東平坦地においては、高温の影響はさらに顕著となっている。総入荷量は、群馬産、栃木産は前年をわずかに上回っているものの、他産地が下回った影響で前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。 絶対数不足により堅調な価格が続ぎ、やや高めに推移した前年を1割弱上回り、平年を1割以上上回った。
	ねぎ 	茨城産を中心に後続の秋田産、北海道産、青森産の入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、停滞していた生育はその後の天候に恵まれ回復して順調であり、太りも回復した。秋田産の作付面積は前年並みであり、生育はおおむね順調であるが、高温・乾燥での生育停滞から7月以降の豪雨により浸水、倒伏、枯死が散見された。北海道産の作付面積は前年並みで、高温でやや太りが阻害されているがおおむね順調であった。青森産の作付面積は前年並みで、気温が高く生育は4~5日ほど停滞した。軟腐病、べと病などの病害や、アザミウマなどの虫害が散見された。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年並みとなった。 絶対数不足や傷みの発生などから、価格は中旬以降堅調な動きとなり、やや高めに推移した前年をわずかに上回り、平年を1割近く上回った。
	レタス類 	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温と定期的な降雨により生育はおおむね順調も、降雨が少ない高冷地では一部干ばつによる肥大不足などが散見された。総入荷量は前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格はやや安めに推移した前年を2割以上上回り、平年をやや上回った。

果菜類	きゅうり 	<p>福島産を中心に、岩手産、秋田産など東北産が主力の入荷となった。福島産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であり、病虫害は散見されるが大きな被害はない。圃場によっては、草勢低下が散見された。岩手産の作付面積は前年並みで、一部圃場でべと病、褐斑病が散見されるが、生育はおおむね順調であった。秋田産の作付面積は前年並みで、大雨や日照不足の影響により生育はやや軟弱傾向であった。曇雨天の影響でべと病、炭疽病が散見された。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度下回った。価格は高値で推移し、前年を2割以上上回り、平年を3割近く上回った。</p>
	なす 	<p>群馬産を中心に、栃木産など関東産露地作の入荷となった。群馬産の作付面積は前年をやや上回り、生育はおおむね順調もハダニ、コナジラミ、カメムシなどの虫害が散見された。一部地域で7月下旬の日照不足による草勢低下が散見された。栃木産の作付面積は前年並みで、7月以降の高温干ばつにより草勢が低下している圃場が多く、着果数が少ない。ハダニ、カメムシなどの虫害が散見された。総入荷量は前年を1割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。価格は絶対数不足により堅調な動きとなり、前年、平年並とも2割以上上回った。</p>
	トマト 	<p>北海道産、福島産、群馬産、青森産中心の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であった。福島産の作付面積は前年並みで、一部圃場で灰色かび病などの病害が散見されたが、軽微であった一方、虫害が平年より多かった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温の影響により落花、尻腐れが見られた。うどん粉病、オオタバコガなど病虫害の発生も散見された。青森産の作付面積は前年並みで、落花が見られるものの生育はおおむね順調だが、病虫害が散見された。総入荷量は前年、平年とも1割以上下回った。価格は全体的な前進と7月下旬の天候不良により下旬に入荷量が減少した影響で高騰し、前年を2割以上上回り、平年を3割近く上回った。</p>
	ピーマン 	<p>岩手産を中心に茨城産、福島産の入荷となった。岩手産の作付面積は前年並みで、一部圃場でアブラムシ、アザミウマなどの虫害が散見されるもののおおむね順調であった。茨城産の作付面積は前年並みで、遅延していた生育は回復し順調だが、一部高温障害が散見された。福島産の作付面積は前年をやや下回り、高温により生育は前進傾向であった。総入荷量は少なかった前年を1割強上回り、平年をかなりの程度上回った。価格は堅調な動きとなり、高めに推移した前年を1割近く上回り、平年を3割近く上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、天候の影響により病害の発生が散見されたが収穫に大きな影響はなかった。中国産の輸入は、実績がほぼなかった前年を大きく上回った。総入荷量は、大幅に少なかった前年をわずかに下回り、平年を2割近く下回った。価格は需要期を外れ、動きは良くなかったものの堅調な展開となり、中旬以降やや落ち着いたが、高めに推移した前年を1割近く上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年を上回り、温暖な気候と適度な降雨の影響により順調であった。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割強下回った。価格は高温の影響で消費は停滞しているものの、それ以上の絶対数不足や台風の影響による不安定な入荷から高値が続ぎ、前年を5割以上上回り、平年を6割ほど上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年をやや上回り、温暖な気候と適度な降雨により生育は4～5日程度前進した。中国産の輸入は、前年の2.2倍以上となった。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回り、平年並みとなった。価格は下旬に向けて落ち着いたものの、前年、平年とも3割近く上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万7867トン、前年同月比98.6%、

価格は1キログラム当たり281円、同117.2%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(8月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	37,867	98.6	96.5	281	117.2	120.6	286	283	276
だいこん	2,233	92.8	81.0	115	107.3	107.4	81	114	151
にんじん	2,439	105.9	99.1	112	73.6	86.1	113	103	116
はくさい	2,879	104.4	103.2	102	116.3	107.0	102	111	98
キャベツ類	6,073	91.5	99.4	92	121.0	99.4	96	98	85
ほうれんそう	279	112.6	94.0	966	108.7	112.4	891	1,001	1,011
ねぎ	686	107.7	107.7	567	109.0	116.5	521	608	579
レタス類	1,971	96.1	91.8	190	122.8	107.5	201	159	207
きゅうり	1,867	92.1	95.3	435	119.5	132.4	421	439	446
なす	846	88.5	84.4	393	115.6	124.6	400	394	385
トマト	3,327	107.3	112.6	414	119.9	126.1	378	374	487
ピーマン	768	108.0	107.7	508	113.7	133.4	522	516	492
さといも	36	96.1	61.3	431	100.1	116.3	417	457	439
ばれいしょ	2,739	126.9	111.8	234	158.4	151.0	266	249	205
たまねぎ	4,209	86.9	88.4	154	145.7	141.6	166	149	148

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	8月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産を中心として岐阜産、青森産の入荷があった。各地とも高温・干ばつの影響により、生育不良で正品率も低く産地出荷量が少ない状況が続いた。北海道産は中旬以降の入荷量が激減し、下旬は前年の半分以下となった。月間でも前年をかなり下回った。岐阜産は、上旬は出遅れて入荷量が少ない状況で、中旬以降は回復して前年並みとなったが、月間では前年をかなり下回った。青森産は全旬を通じて入荷量が安定せず、月間では前年を大幅に下回った。月間全体でも前年をかなりの程度下回り、平年を2割程度下回った。 価格は絶対量不足から高値推移となり、旬を追うごとに急騰した。月間では前年、平年ともかねりの程度上回った。
	にんじん 	北海道産の入荷が主体であった。十勝地区を中心に不作で、産地出荷量が少ない上に安定せず、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。国産の品薄感から業務関係を中心に輸入の中国産の利用が増え、上中旬は入荷量が多くなった。月間全体では前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。 前捌きも悪く、価格は全旬を通じて伸び悩んだ。月間では前年を大幅に下回る価格となり、平年比もかなり下回った。

葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産の入荷が主体であった。月の前半は高温と干ばつの影響から生育不良となり、入荷量は伸び悩んだが、盆明け以降に生育が回復傾向となり、下旬には増加した。月間では前年、平年ともやや上回った。</p> <p>価格は、上中旬は不足感と野菜全体の高値傾向の影響もあり高値で推移した。下旬にはやや落ち着いたが前年と比べるとかなり高く、月間でも前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	キャベツ類 	<p>群馬産を中心に長野産の入荷があった。群馬産は、上旬は干ばつの影響が残り入荷量は伸び悩んだが、中旬以降は玉肥りが回復し、旬を追うごとに増えた。長野産は南佐久地区は少なく、北佐久地区はやや増量傾向で、旬を追うごとに増えたが、月間では前年をかなり下回った。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は野菜類全体の不足感から堅調に推移した。月間では安値だった前年を大幅に上回り、平年をわずかに下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>岐阜産が中心となり、北海道産の入荷もあった。高温の影響で生育不良となり、産地出荷量は不安定で少ない状況が続いた。月間の入荷量は極端に少なかった前年をかなり大きく上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は不足感から高値推移となり、旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年、平年ともかなり大きく上回った。</p>
	ねぎ (白ねぎ) 	<p>長野産と北海道産が主体となり、鳥取産の入荷もあった。主力産地はともに順調な出荷を続け、全旬を通じて入荷量は多く下旬には増量となった。月間全体では前年をかなり上回った。</p> <p>価格は全旬とも安定した動きの少ない推移となったが、月間では前年をやや下回った。</p>
	ねぎ (青ねぎ) 	<p>主力の徳島産、香川産、高知産と近隣の奈良産、大阪産の入荷があった。細ねぎは高知産と静岡産が主体となった。各産地とも高温の影響により生育不良となり、入荷が不安定で量も少ない状況が続いた。徳島産は全旬とも前年を大きく下回る入荷量で、香川産も月間では前年を大きく下回った。月間全体でも前年を大幅に下回った。</p> <p>価格は絶対量不足から高騰し、需要期で引き合いも強く高値推移となった。月間では前年の1.5倍以上の価格となった。</p>
	レタス類 	<p>玉レタスは長野産の入荷となった。高温の影響により生育不良となり、産地出荷量が少ない状況が続き、月間では前年を下回る入荷量となった。サニーレタスも長野産の入荷で、レタス同様に高温による生育不良で、産地出荷量が少ない状況であった。リーフレタスも長野産が中心となる入荷で、レタス同様に高温の影響で生育不良となり、産地出荷量は少ない状況であったが、加工筋からの発注が多く、入荷量は前年を上回った。レタス類全体では前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格はレタス類の全体的な不足感と野菜全体の高値の影響により高値で推移し、月間では前年を大幅に上回り、平年比をかなりの程度上回った。</p>
果菜類	きゅうり 	<p>福島産が中心となり長野産などの入荷があった。高温障害があり各産地とも出荷量が少ない状況が続いた。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年比をやや下回った。</p> <p>価格は野菜全体の不足感と高値の影響を受けて高騰し、絶対量不足から旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年を大幅に上回り、平年比を3割以上上回った。</p>

<p>なす</p> 	<p>千両系は茨城産が中心となり、この時期の主力の群馬産、京都産、徳島産などの入荷があった。長なすは愛媛産を中心に茨城産の入荷があった。気温高から各産地とも前進気味で、高温による不良果もあり、盆以降は成り疲れも出て産地出荷量は伸び悩んだ。下旬には台風による長雨の影響もあった。月間全体では前年、平年ともかなり大きく下回った。</p> <p>価格は、量販店での売場が広くとられ、他の野菜の不足感から発注が多く、引き合いが強まり、旬を追うごとに微落傾向も高値推移となった。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を2割以上上回った。</p>
<p>トマト</p> 	<p>岐阜産を中心に岡山産、熊本産、愛媛産などの入荷があった。各産地とも生育は順調で、上中旬は産地出荷量も安定していたが、停滞気味で西日本に長雨をもたらした台風10号の影響もあり、下旬は伸び悩み前年をかなり下回った。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は野菜全体の不足感から発注も多く、高値推移となり、下旬には不足感からさらに高騰した。月間では前年を大幅に上回り、平年比を2割以上上回った。</p>
<p>ピーマン</p> 	<p>茨城産を中心に愛媛産、宮崎産、青森産、岩手産などの入荷があった。各産地とも高温の影響により着果不良もあり、産地出荷量は伸び悩んだ。茨城産は、上中旬は順調な出荷であったが、下旬は前年を大幅に下回った。他の主産地も盆明け以降に減少したところが多く、東北産地が前進気味で補てんする形となった。月間全体では前年、平年とも上回った。</p> <p>価格は野菜類全体の不足感の影響で高値推移となり、旬を追うごとに下落傾向も、月間では前年をかなり大きく上回り、平年を3割以上上回った。</p>
<p>土物類</p> <p>さといも</p> 	<p>宮崎産の入荷となった。盆用の発注は多く、上旬の入荷量は前年を上回ったが、盆明け以降は需要もなく減少した。業務向けでは輸入の中国産の引き合いもあった。月間全体では前年をやや下回り、平年を4割近く下回った。</p> <p>価格は月の前半は盆需要に向けて高値となったが、後半は下落した。月間では前年並みとなり、平年を大幅に上回った。</p>
<p>ばれいしょ</p> 	<p>丸芋は北海道産が中心となる入荷で安定した順調な出荷を続け、不作で入荷量が少なかった前年を大幅に上回った。メークインも北海道産が中心となる入荷であったが、降雨や台風の影響により荷物の遅延が起きるなど不安定な入荷となり、中下旬が少なく、月間でも前年を大幅に下回った。ばれいしょ全体では前年を2割以上上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は高値続きの影響が残る中で、野菜全体の高値も影響し、旬を追うごとに下落傾向も高値推移となった。月間では前年、平年とも1.5倍以上の価格となった。</p>
<p>たまねぎ</p> 	<p>上旬までは兵庫産が主体となり、北海道産の入荷もスタートして中旬以降に主体となった。前年の北海道産の不作により不足が続いていた中で、兵庫産の出荷が前進気味となったため産地残量が少なく、北海道産がスタートしたことから中旬以降に大きく減量となった。北海道産は平年通りの出荷となり、旬を追うごとに入荷増量となった。国産の高値と不足感から、輸入の中国産の入荷も安定的にあった。月間全体では兵庫産の入荷減量が影響して前年、平年とも大きく下回った。</p> <p>価格は高値続きの影響が残る中で、北海道産がスタートして主体となった中旬以降に下落したが、兵庫産の減量で品薄感が出たため高値のまま推移した。月間では前年、平年とも4割以上上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした10月の見通し

8月中～下旬に台風が2つ上陸し、9月初めまで全国的に豪雨に見舞われたが、九州や四国産地については、今のところ大きな被害は報告されていない。果菜類は10月には夏秋産地からスムーズなバトンタッチが行われるだろう。それでも予期せぬ雨の影響で、露地野菜を中心に地方市場では品不足となっている。東日本や北日本では日照不足と残暑が厳しく、生育の回復を遅らせている。そういった全般的な出回り不足の影響から、中央市場への出荷が集中することにより価格高の局面が長く続くだろう。また、この時期は秋冬野菜の播種時期で、特別大きな被害は報告されていないが、各産地とも若干の圃場^{ほしやう}で蒔き直しなどが行われており、11～12月になって出荷が遅れることが予想される。猛暑対策では、^{てつ}昨年^{こぞ}の轍^{わづ}を踏まないといった積極的対策が功を奏している産地もある。

根菜類



だいこんは、北海道産（道央）は8月後半以降雨が続き、病気が見られる。作付けが減っており、9月の出荷は前年を下回り、10月の出荷はない見込みである。北海道産（道東・標茶）は出荷が若干減ってきたが、平年並みの状況であり、10月に入り出荷は減少し、東京市場への出荷は10月20日頃で切り上がる見込みである。千葉産は、作付けは前年並みで、播種作業は早いと8月5日、多くは8月20日過ぎから行い、出荷は9月20日過ぎから始まり、10月20日頃に出揃う見込みである。青森産は9月に入り出荷が増え、9月中旬～10月2週目までは多いがその後減少し、切り上がりは11月初め頃と予想される。今年は、圃場での廃棄は昨年より少ないが、作付けが減少したため生産量は前年並みと予想される。

にんじんは、北海道産（道央）は病気が見られ、10月にはかなり減ってくると予想される。北海道産（道北・美幌）の出荷のピークは平年どおり9月から10月上旬まで続き、その後、中下旬には出荷量が減少する見込みである。前年は10月いっぱいまで切り上がった。品種は「向

陽2号」「天翔5寸」で中心サイズは例年並みのMである。北海道産（十勝・富良野）は干ばつの影響により曲がりや虫食いが発生し、歩留まりが悪くなっている。Mサイズ中心だが、やや小さめである。生産量は前年比減となり、切り上がりも早くなることが予想される。



葉茎菜類

キャベツは、群馬産は9月に入りピークとなっており、現状までは順調に出荷されている。10月上旬までこのペースで続き、中旬から減少し、11月に入り切り上がることが予想される。愛知産は10月中旬から例年通り出荷の開始が見込まれ、天候不順で作業開始が遅れた圃場もあるが、開始時期の遅れはないと予想される。千葉産は9月20日頃から出荷が始まり、10月20日頃から出荷量も増える見込みである。台風10号による被害は、ごく一部の圃場で種が流された程度であった。岩手産は、定植が出来なかったことや雨の影響により9月は出荷が一旦減り、10月には再度増加し前年を上回り、11月中旬に切り上がる見込みである。

はくさいは、長野産は8月下旬頃より出荷は増えてきており、9月中下旬に入ってさらに増えてくる。作業はキャベツと同時進行しており、キャベツが終わるとはくさいは増えてくるが、病気で圃場廃棄も相当数あると見込まれる。それでも前年の干ばつと比較して、今年は適度な降雨があり、前年を上回る出荷が予想される。

ほうれんそうは、栃木産は例年と同様に、出荷は少なめである。前年は、夏の生育停滞から伸び切らないうちに出荷され、ピークはなかった。今年は前年より状況は良く、10月は多めに出荷され、年内いっぱいの出荷が予想される。群馬産は高温と日照不足の状況が続くなど、出荷量は少なめである。雨除け物は9月2週目から増えてその後は終盤を迎えると予想される。10月中旬から露地物が出始まり、下旬から本格化する見込みである。播種作業は場所によっては蒔き直しもあろうが、順調である。

ねぎは、茨城産は8月後半に入り、雨天が続く、軟腐病^{なんぷびょう}が散見される。防除は徹底しているものの、気温が高く、9月の出荷量は前年の

90%程度と見込まれるが、10月は回復し前年並みとなる見込みである。青森産は例年9月初旬頃が出荷のピークとなるが、今年は天候不順により出荷量は80%程度となっている。天候が回復次第、出荷は10月に前年並みに追いつき、12月上旬まで続くことが見込まれる。北海道産（道南・新函館）は6月からハウス物、7月中旬から露地物が始まり、9月に入り出荷量が増え10月が最大のピークとなろう。11月20日頃まで数量的にまとまった出荷が見込まれる。前年は猛暑で出荷は減ったが、今年は順調に出荷されている。

レタスは、茨城産は前年も猛暑で、9月の出荷物は一部^{とうだ}臺立ちした。今年はスタートを抑え気味にして、10月に入り一斉に開始するといった作付けにしている。現状の作業は順調で、台風10号の雨の影響はない。兵庫産は、圃場では台風10号の特別な影響はなく、10月に入り前年並みに出荷され、12月に向けて徐々に増えて来ると予想される。群馬産はやや少なめの出荷となっているが、9月中旬から増え始め、その後は早めの展開で10月2週目まで続き、その後はかなり減少することが見込まれる。長野産は9月に入ってからの出荷はやや少なめで推移し、10月に入ってから減り始め、10月中下旬に切り上がることが見込まれる。

果菜類



きゅうりは、群馬産は猛暑の影響がないわけではないが、農家の管理によりほぼ順調である。盆前の定植物が9月15日から20日頃に一回目のピークが来ると予想している。その後も引き続き多く、10月に入っても継続して出荷がある見込みである。埼玉産の抑制きゅうりは9月下旬から出荷が見込まれ、当面のピークは10月上旬となるが、猛暑でやや生育が遅れており、引き続き11月中旬まで出荷量が多い見込みである。

なすは、高知産は台風の影響もなく、例年並みに始まっている。主力は8月末から9月上旬に定植されており、これが10月初旬頃から出荷が始まり、その後、年末に向けて徐々に増えながら推移するが、冬至の頃にいったん減ると

いった展開も予想される。昨年から本格的に切り替わってきた品種「お竜」は、今年は全体の80%を占めている。栃木産は、猛暑で花落ちしたことが影響し出荷量は前年の70%台となっている。それでも9月中下旬には盛り返して来ると予想している。10月には前年並みとなるが、徐々に減りながら推移し、降霜の11月上旬頃までの出荷が見込まれる。福岡産は例年並みに9月10日のやや前頃から出荷の開始が見込まれている。前年は9月6日からやや早かった。台風10号の影響は特になく、年内は11月のピークに向け、増加傾向で推移する見込みであり、作付けは前年並みである。

トマトは、北海道産は高温による着果不良のため、現状までは前年を下回る出荷となっている。切り上がりは11月中旬頃が見込まれ、今後の出荷量は農家の管理次第である。熊本産は例年と同様に9月下旬から始まろう。台風10号では、ハウスの倒壊といった被害はなかったが、一部高温の影響によりハウス物で萎れが見られる。作付けは一部ミニトマトへの転作はあるが、全体では前年と同様である。群馬産は7月は多かったが、8月は少なめの出荷となった。9月、10月についてはほぼ前年並みを予想している。青森産は猛暑で花落ちし、少なめの出荷となっている。前年同様、10月には前年を上回る出荷が予想される。早い人は10月に切り上がるが、全体としては11月初め頃までと見込まれる。茨城産は前年は猛暑の影響で少なかったが、今年についても似た展開となっており、9～10月がピークで、11月いっぱい出荷されるが、前年を下回るであろう。

ピーマンは、茨城産は暑さで花落ちした影響で少なめの出荷となっており、さらに変形果が多く、A品率が低下している。回復は気温が下がってからと予想され、10月には回復して前年並みの出荷に戻ると予想している。岩手産は露地物は9月で終了するが、前年と比較して減収となった。ハウス物は8月後半に取り戻したが、日照不足と降雨が多く、例年を下回る出荷と予想される。10月20日頃までの出荷となる見込みである。

土物類



さといもは、埼玉産は、共同選果は9月23日にスタートするが、個人選果の市場出荷は開始している。作柄としては前年を上回る出荷が予想され、昨年は無灌水圃場が大幅に減産したが、今年は問題なく、生産量は前年を上回ることが見込まれる。

ばれいしょは、北海道産（芽室・十勝）の「メーカーイン」のピークは10～11月で、出荷は年明けの2月中旬から3月にかけて続くことが見込まれる。生産量は干ばつの影響もあり平年を下回ると予想される。本年産については、8月に入り雨がが多く、二次生長して変形果が多く、さらにライマン価（でん粉価）も下がっている。北海道産（道央・ようてい）は9月から12月が年内のピークになるが、出荷量は前年並みである。Lサイズ中心で、大きさも平年並みである。

たまねぎは、北海道産（道央・岩見沢）は中生から晩生種の収穫に取り掛かっている。前年は廃棄なども多かったが、今年は肥大も品質も良好である。適度の雨が合ったことも幸いした。年内の出荷がピークで、年明けは少なくなる。



その他

ごぼうは、青森産は8月下旬から出荷が始まり、積雪の前まで続く見込みである。その後は貯蔵した物の出荷となり、収穫できなかった物は雪解け後の春掘り物となることが予想される。作柄は良好で、前年並みの出荷と予想される。

れんこんは、茨城産は前年と同様に豊作傾向である。猛暑の影響は若干あるが、出荷に影響ない。

ブロッコリーは、北海道産は例年と同様に出荷量は少なくなっている。今年は生育そのものは順調に推移したが、8月終盤から9月にかけての雨で病気になる可能性がある。10月末ま

での出荷となるが、10月に入り減少する見込みである。例年の10月と比べれば収量はあるものの、作付面積の減少が影響して、生産量は90%程度と予想している。長野産の秋ブロッコリーは現状増えてきている。9月中旬から10月初め頃をピークに、11月には少なくなるが、出荷は続き、10月としては前年並みを予想している。埼玉産は例年並みで10月に入ってからのお荷と予想している。福島産は9月20日過ぎから始まり、ピークは10月中旬で、切り上がりは11月末頃と予想される。現状は生育順調で、作付けはやや伸びている。

かぼちゃは、北海道産は収穫が始まったところであるが、雨が多くやや遅れている。そのためかぼちゃの葉茎部などが黄変するといった心配がある。日焼け果が多くなれば貯蔵して一旦休み、12月に再び出荷するというスタイルとするか再検討中とのことである。

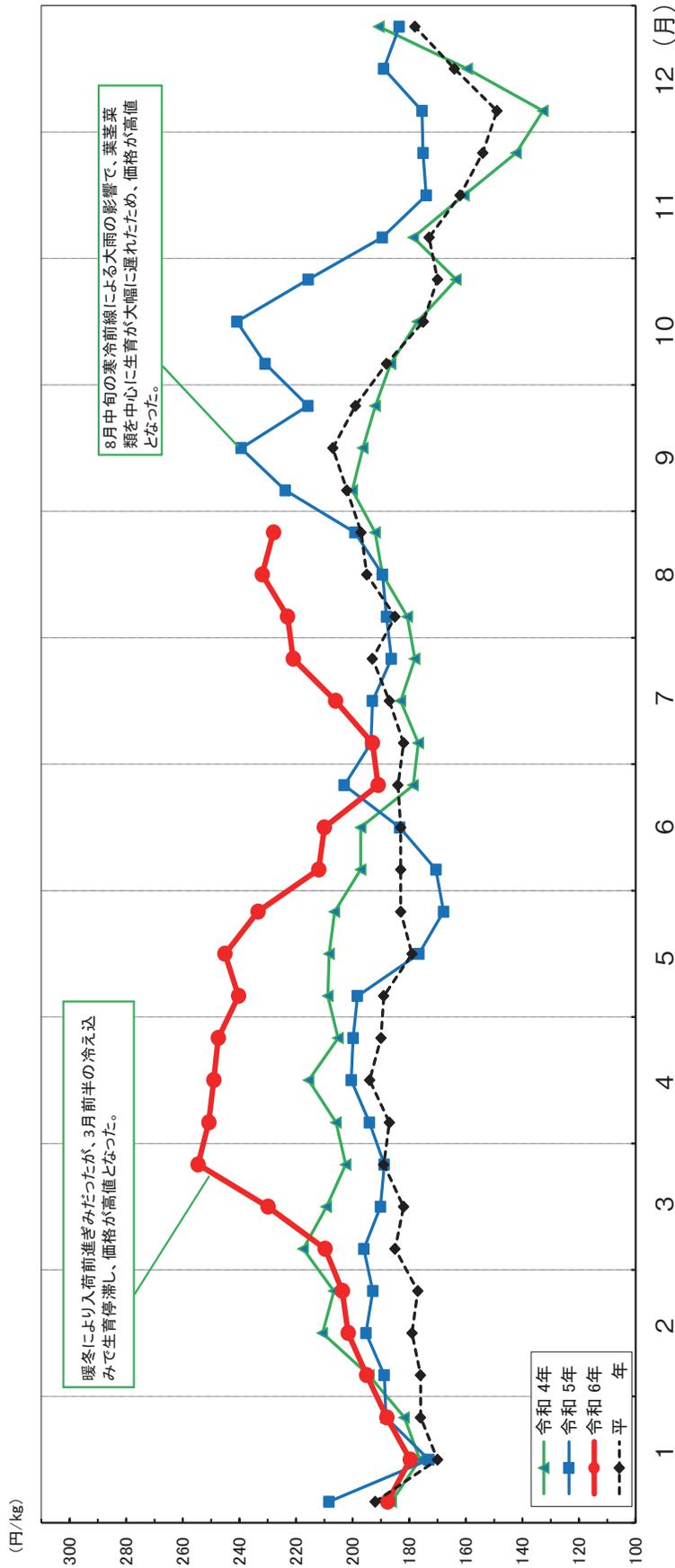
かんしょは、千葉産の収穫は始まっているが、10月の出荷は前年並みである。現在の主要な品種は「シルクスweet」であり、「紅はるか」は11月に入ってからと見込まれる。石川産は「五郎島金時」となるが出荷のピークは年明け1月下旬で、年内は9月の出荷開始から一定程度の出荷が予想される。

にんにくは、青森産は6月に収穫が終わっている。7月中旬まで風乾し、その後ほとんどが氷温貯蔵庫で出荷を待つ。9月の段階では風乾物が販売されている。氷温物は10月10日から出荷開始である。やや小ぶりであることから、出荷量は平年を若干下回る見込みである。

（執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)

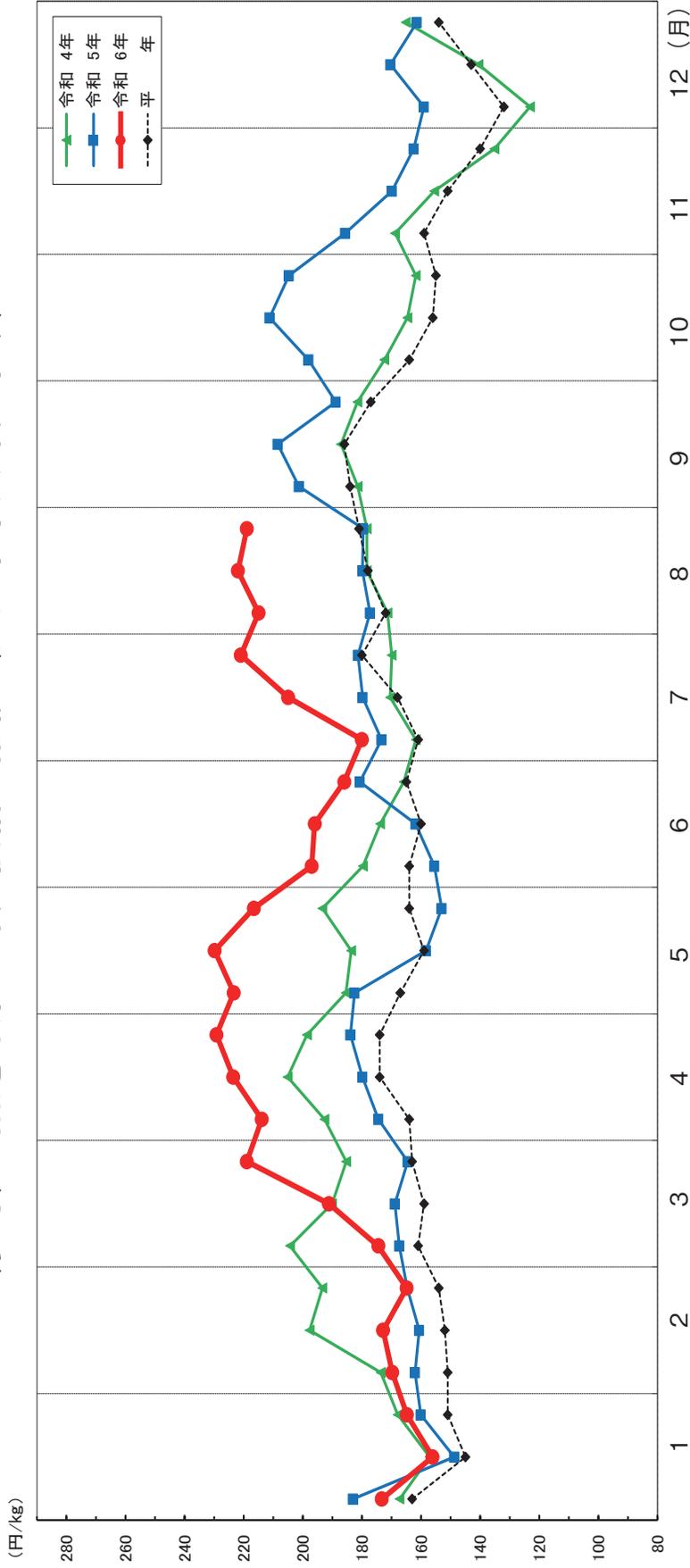


資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬																																		
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161	
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	186	180	205	221	215	222	219														
平年	163	145	151	151	152	154	161	159	163	164	174	174	167	159	164	164	160	165	161	168	180	172	178	181	184	186	177	164	156	155	159	151	140	132	143	154	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。